

構文 (constructions) としての慣用表現

— *for all to see* の場合 —

南 佑 亮

Idiomatic Expressions as “Constructions” : The Case of *For All to See*

MINAMI Yusuke

1. はじめに

本論文は、認知言語学の立場から、現代英語の *for all to see* という慣用表現の分析を試みる。*for all to see* を確立した表現として記載している辞書・辞典は見受けられるが、この表現を言語学的研究対象とした論文は存在しない。本論文の目的は、大規模コーパス (COCA) とデータベース (AR) を用いて *for all to see* の記述的な研究成果を提示し、この表現が認知言語学における説明概念や理論に対して持つ意義を明らかにすることである。以下、本節では、*for all to see* の基本的な特徴を述べ、本論文の出発点となる問題を特定しながら、2 節以降のアウトラインを示す。

はじめに、この句の形式的特徴を確認しておく。この句は全体で一つの *to* 不定詞節を成している。*to* 不定詞節内の動詞 *see* の主語は、*for* で導かれた *all* である。一方、この動詞の目的語は形式上欠落しているものの、意味解釈上は *see* が表す動作の対象は *for all to see* が付加された主節内で表現される (または含意される) 存在物に対応する。「形式上の目的語」は伴わないが「意味上の目的語」が存在するということである。¹⁾ 具体例 (1) - (3) を見ておこう。動詞 *see* の意味上の目的語に相当する要素は *for all to see* を伴う文内の要素であり、(1) や (2) の場合は主節内の目的語 (*the weapon, him*)、(3) の場合は主節内の主語 (*the chemical formulae*) である。²⁾

- (1) He held the weapon up **for all to see**, and his eyes met those of Artur Bader. (COCA 1991) ³⁾
- (2) Perhaps we should take this man and exhibit him **for all to see**. (COCA 1998)
- (3) The chemical formulae were written right on the box **for all to see**. (COCA 2008)

次に、この句の意味については、OALDに(4)のような記述がある。⁴⁾

- (4) clearly visible; in a way that is clearly visible (OALD, s.v. *for all to see*)

この記述は、*for all to see* が少なくとも2種類の意味解釈に対応すること、すなわち多義的であることを物語っている。注目したいのは、(4)の2つの意味の記述に共通して‘clearly visible’という表現が含まれることである。動詞 *see* の基本義は視覚による知覚であるから、視覚に関わる形容詞 *visible* が定義に含まれるのはごく自然なことだが、よく知られているように、*see* は多義性を示す動詞である。⁵⁾ したがって、*for all to see* 句においても *see* が多義的であることは十分に考えられる。事実、(5)に示すように、形容詞 *visible* の意味は視覚知覚の可能性には限定されない。2) の意味の場合は、視覚に限定されない、認識の可能性を表している。認知言語学の慣例に倣い、多義構造における意味の差を、当該表現が理解される認知領域 (domain) の違いに帰着させるならば、1) は知覚の領域で、2) は認識の領域において得られる意味であると規定できる。

- (5) 1) that can be seen; 2) that is obvious enough to be noticed (OALD, s.v. *visible*)

このように、*visible* の意味解釈には「知覚」と「認識」という異なる認知領域が関係するため、形容詞 *visible* を含んだ(4)の意味記述を額面通り解釈すれば、動詞 *see* の解釈は *for all to see* において両方の領域で解釈可能であることが予測される。(4)では2種類の意味において *visible* が用いられているため、結局、*for all to see* という句には合計4通りの意味解釈がありうることになる。結論を先に言えば、これら4つの意味は全て実際に観察される。問題は、どのような場合にどの意味が得られるかということである。

以上の問題を出发点とし、2節では、*for all to see* が実際に用いられる文の形式的パターンを特定し、それぞれのパターンにおいて、OALDの示すどの意味が得られるかを特定していく。3節では、(4)の意味記述が捉えきれない特殊な用法の存在を指摘する。この用法は、2節で特定したパターンのうち、限られたものでしか観察されない。この制限を認知言語学的な観点から説明し *for all to see* の多義構造を的確に捉えるためには、当該文が直接的に表現する内容に加えて発話者の役割と使用事態 (usage event) も考慮に入れなければならないことが明らかになる。最後に4節では、3節までの議論を踏まえ、用法基盤の構文文法理論の観点から、*for all to see* という表現が複数の構文 (constructions) から形成されている可能性について論じ、今後のさらなる研究の方向性を探る。5節は結語である。

2. *For all to see* が生起する形式的類型

本節では、*for all to see* が生起する形式的タイプとそれぞれの基本的特徴を概観する。COCAとARを用いて該当する事例を抽出して一つずつ精査した上で、*for all to see* を伴う文 (以下、*for all to see* 文と呼ぶ) の示す文法的特徴によって4つのタイプに分類し、1節で論じた点を踏まえながら、それぞれのタイプにおいて得られる意味解釈を検討していく。

2.1. タイプ I : 動詞文 (能動文)

最初に見るのは、動詞述語文に *for all to see* が後続するタイプである。他動詞文の事例と自動詞文の事例がある。⁶⁾ 以下、この順で確認していく。

他動詞文の事例中で最も際立つのは、(6)に挙げるような *hold up* (～を持ち上げる) という句動詞と共起する事例である。この事例には、(7)に挙げるように、多数の変異形が存在する。(7a)と(7b)は *hold up* の不変化詞 *up* が、類似する意味を表すもの (それぞれ *aloft*, *high*) になったものであり、(7c)では *hold* が別の動詞 *lift* に置き換わっている (句動詞全体の意味的類似性は保たれている)。(7d)では、*hold up* に近い意味を表す動詞 *raise* が用いられている。*hold up* の事例を類推 (analogy) の基盤とした exemplar category を成しているといえそうである (Bybee 2010)。いずれの場合も「何かを上方を持ち上げることで、それを誰にでも見えるような状態にする」という使役的な事態が描かれている。

- (6) a. He *held* the weapon *up for all to see*, and his eyes met those of Artur Bader. [= (1)]
 b. The prince *held up* the bag *for all to see*. (COCA 2000)
 c. Trophies are given out to representatives from different salons. Justice receives a trophy and is congratulated by Jessie and company. She *holds* it *up for all to see*. (COCA 1993)
- (7) a. He *held* the video box *aloft for all to see*. (COCA 1999)
 b. When he returned, he *held* the Great Seal *high for all to see*. (COCA 1996)
 c. He *lifts* it *up for all to see*. (COCA 1998)
 d. On the other hand, goldenrod *raises* its brilliant yellow blooms against the sky *for all to see*. (COCA 1991)

上記のグループ以外にも様々な他動詞 (句) の事例があるが、それらは(8)に挙げるように、提示・開示・公開を意味するものに集中している。当該文は、「主語指示物が目的語指示物に働きかけることによって、目的語指示物が誰の目にも触れる場所に移動する (またはそのような状態に変化させる)」という事態を表す。実例を(9)に示す。

- (8) *display, expose, exhibit, post, show; lay bare, make available, let loose, …*
- (9) a. The hand proudly *displays* the ring *for all to see*. (COCA 1997)
 b. Perhaps we should take this man and *exhibit* him *for all to see*. [= (2)]
 c. Such interpretive remarks, especially when found in novels that — like this one — *expose* their internal operations *for all to see*, serve a double function: they advance the plot and guide our reading. (COCA 1994)
 d. Gawker editors jeered and *posted* the letter *for all to see*; a day later apologized, acidly. (COCA 2006)

次に、自動詞文の事例に移ろう。「主語指示物が誰の目にも触れる位置に移動する（またはそのように振る舞う）」という事態か、もしくは「主語指示物が誰の目にも触れる位置（状態）にある」という事態を表す。(10)は前者の例、(11)は後者の例である。

- (10) a. Messages (also known as twitters, twits, and tweets) can be private, sent only to friends or groups of friends, or they can *appear* on Twitter's home page **for all to see**.
(COCA 2007)
- b. He gave a weepy testimony about the house God had given him, *passing* around the title **for all to see**.
(COCA 2009)
- c. "There she *stood* on stage **for all to see**, showing off like the greedy songbird she was."
(AR: from the movie *Amadeus*)
- (11) a. She spent a half-hour explaining to me how Uma Thurman is her new heroine, her reason to hope and overcome what lies ahead. Maxine even has a model of Uma from the "Kill Bill" movies. It *sits* in her living room like a revered statue **for all to see**. (COCA 2006)
- b. Now, the embodiment of that image will *be* outside the ballpark **for all to see**. (COCA 2005)

このように、タイプ I の事例の間では、意図性・外的要因の有無や変化の含意の有無といった、動詞文の研究において頻繁に言及される意味カテゴリーに関して様々なバリエーションが見られる。しかし、いずれの場合も *for all to see* の意味解釈は OALD の記述の 'in a way that is clearly visible' の方に該当すると見做してよいと思われる。動詞 *see* の意味解釈の方は一貫して知覚の領域に留まっているようである。中には (9c) や (9d) のように、視覚に加えて認識・理解も要求される事物について述べている場合もあるが、その場合も、本質的には視覚で捉えられなければならないという点は共通している（小説も手紙も、視覚を用いて読むことが想定された物である）。

2.2. タイプ II : 過去分詞述語文

文の述語を成す過去分詞に *for all to see* が後続するタイプである。過去分詞という形式に対応する意味解釈は、行為主体の意図性が明確に含意されている場合からそのような含意が希薄な場合まで様々な場合があることはよく知られているが、後に *for all to see* が伴う場合もその振る舞いは同じである。(12)は、行為・原因主体の意図が含意される典型的な例である。

- (12) a. The prisoners taken *were crucified* before the walls **for all to see**. (COCA 1998)
- b. The chemical formulae *were written* right on the box **for all to see**. (COCA 2011)

これらの文からは、主語指示物に働きかけて過去分詞が描写する状態の実現に意図的に貢献した動作主・原因主体の存在がはっきりと想起できる。(12a) では囚人を捕えようとして捕えた人物がいたこ

と, (12b) では意図的に化学式を書いた人物がいたことが明確に含意される。

次に, 主語指示物に働きかける行為主体の意図がより希薄化している事例を見ておきたい。

- (13) a. But the industry's defenders just as quickly concede — for the evidence is *etched* starkly on the mountainsides **for all to see** — that for many years the cutting was out of hand.
(COCA 1993)
- b. He followed Brother S outside and stopped abruptly, the sound of the drilling rig grinding in his skull, the harsh sunlight exposing him in his undershirt, without shoes, as if he'd been stripped naked and branded, his sins *exposed for all to see*. (COCA 1993)

(13a) では, 山間部の木々の伐採には「証拠を刻む」という動作に及んだ意図的な行為主体が存在したということは意味していない。(13b) でも, 彼の罪を人目に晒すという行為に実際に及んだ何者(何物)かの存在は想定されていない。

以上の観察から, 意図性・動作主性(他動性)の要因はタイプⅡにおける *for all to see* の使用条件には関わっていないことがわかる。尚, このタイプにおける *for all to see* の意味は, OALDの2つの記述のうち, 'in a way that is clearly visible'に相当すると言えるだろう。動詞 *see* の意味解釈は, 視覚領域の場合が多いが, (14)のように認識領域の関わる例も存在する。「動機」や「優先事項」は, 視覚だけ捉えるものではなく, より高次の認知活動を要求するものである。

- (14) a. “And the plaintiffs' motives,” the statement added, “will be *revealed for all to see*.”
(COCA 1998)
- b. Once again, the GOP's priorities are *revealed for all to see*. (COCA 2008)

2.3. タイプⅢ：形容詞文

3つ目は, 形容詞を述語とする叙述文に *for all to see* が伴うタイプである。述語に現れる形容詞は, (15)に挙げるように, 何かははっきりと知覚・認識できる状態にあることを表すものにかかなり限定される。具体例を(16)と(17)に挙げる。

- (15) *clear, evident, obvious, open, plain, stark, visible, ...*
- (16) a. To Neckel's surprise, the digital shots restored time for his company as well. For starters, because their output was *visible for all to see*, employees became more productivity conscious.
(COCA 2000)
- b. A small, but noisy demonstration by anarchists appeared to deter the couple from posing for photographs in this street itself. But their happiness as they stood in the doorway was *plain for all to see*.
(COCA 2000)

- c. Garibaldi's kitchen is sequestered behind the dining room, while Marzano's is *open for all to see*. (COCA 2010)
- (17) a. Still, the deadly emotions inspired by Mideast peace accords are now *visible for all to see*, and further progress will need constant attention by U.S. negotiators. (COCA 1995)
- b. "The ethics are in the methods. It is *clear for all to see*," Silva told me, encapsulating the view held by many in Health Net. (COCA 2010)
- c. Eu is popular "because her success is *open for all to see*," says colleague and friend Margaret Ng, also a Hong Kong legislator. (COCA 2006)

このタイプにおける *for all to see* の意味は、OALDの2つの記述のうち 'clearly visible' の方に近いと言える。ただし、まさしく *visible* という形容詞も用いられることから伺えるように、述語の形容詞単独でも 'clearly visible' を意味しているため、*for all to see* にはその述語の意味を強調しているという方が正確である。上記の例における当該の文はすべて、*for all to see* を省略したとしても文として意味をなすことができるが、*for all to see* を伴う場合よりも意味は弱くなる。尚、動詞 *see* の表す意味領域については、このタイプの事例は均一に分布しておらず、様々な段階がある。「知覚」寄りのものもあれば、「認識」に傾斜しているものもある。上掲の(16)は前者の、(17)は後者の例である。意味解釈の傾向は語によってもばらつきがある。例えば、*evident* はその語彙的意味から予測できるとおり、知覚領域解釈の例は見当たらない。

2.4. タイプⅣ : *there*

4つ目は、be動詞の直後の位置に *there* が用いられるものである。このタイプの *for all to see* 文は、タイプⅢと同様、主語指示物が視覚または認識のレベルで誰にとっても明らかであることを表すが、タイプⅢと違い、述語の位置にある *there* が 'clearly visible' という意味は担い得ないため、主語指示物の「明らかである」という属性描写は *for all to see* が担う。具体例を以下に挙げる。

- (18) a. Soon the images of the tsar and tsaritsa, their servants, and three of their children — including Anastasia — were *there for all to see*. (COCA 2000)
- b. My use of colors may appear exaggerated to some observers. However, I find that as soon as I start accepting their criticism and altering my work, I come upon a particularly colorful and dynamic scene that I'd like to paint and realize that such vibrant colors really are *there for all to see* if they only take the time to look. (COCA 1990)
- (19) Now, the problem for advocates of this theory is that we've tried their approach — on a massive scale. The results of their experiment are *there for all to see*. (AR 2012)⁷⁾

- (20) a. The similarities between Platonic contemplation, on the one hand, and perceptual contemplation and its place in our lives, on the other hand, is *there for all to see*.
(COCA 1997)
- b. The church is witnessing the emergence of immense energies among Christian women, energies that at present are not given proportional scope. The need for an institutional conversion is *there for all to see*.
(COCA 1992)

(18)はいずれも知覚の領域で意味解釈がなされる事例である。(20a)では、*see*の対象となる主語指示物が (*images*という語からもわかるように) 誰の目にも明らかなことを表している。(20b)では絵画における色使いの話題であり、当該文は *vibrant colors* が誰にでも見えるということ述べている。(19)は、視覚も関係しているが、実験結果は目で見るだけではなく、見た人間の理解も要求するものであるため、より認識領域が前景化している。(20)においては、さらに明確に認識領域が関わっている。特定の概念間の類似性や組織の改革の必要性といった事柄は視覚で捉えられるものではなく、より高次の認知過程を必要とするからである。

2.5. まとめ

本節では、*for all to see*の事例を、それが伴う文の文法構造の違いによって4種類のタイプに分類し、それぞれのタイプで得られる意味解釈の可能性について検討した。タイプIとIIにおいては視覚領域の解釈が優先的に得られ、タイプIでは認識領域の解釈は得られない。一方、タイプIIIとIVはともに、いずれの意味解釈にも対応しているようである。

3. *For all to see*の特殊用法

ここまでは、*for all to see*の意味をOALDの記述および*see*の多義(「知覚」「認識」という観点から検討した。ところが、*for all to see*を伴う文が実際に用いられる文脈も視野に入れて事例を観察すると、*for all to see*文が単なる叙述ではなく、発話者の言語行為(speech act)を担う用法も存在することがわかる。⁸⁾本節ではこの特殊な用法を解明していく。3.1.でこの用法の特徴づけを行い、この用法がタイプIIIとIVの形式に限定されていることを確認する。3.2.で、この用法が特定のタイプでのみ得られることに認知的な観点から説明を与える。最後に3.3.で再度OALDの定義と「知覚」「認識」領域の区別に立ち返り、3.1.で挙げた用法の位置づけについて考察する。

3.1. 言語行為 (speech act) に関わる用法

まず、以下の事例を参照されたい。

- (21) Despite all the picturesque churches that dot the American landscape, religion seems to have little or no public authority over society. And the “death of God” appears to have resulted, just as Nietzsche said it would, in the collapse of traditional morality and the rise of moral relativism.

The disastrous consequences of this moral upheaval have been compiled by Bill Bennett in his “Index of Cultural Indicators.” But they are *evident for all to see*. America is a country where the traditional family seems to have irretrievably broken down: The typical marriage ends in divorce, and illegitimacy is now common across racial and socioeconomic lines. (COCA 1992)

- (22) Still, it took a while for ESOPs to catch on, partly because all those lawyers and financial advisers couldn’t quite believe what the tax code was telling them. But today, the Kelso-Long legacy is visible *for all to see*: Sprinkled around the U.S. are hundreds of companies that “went ESO” long ago, are now wholly owned by their employees, and are prospering beyond any founder’s wildest dreams. (COCA 2005)

- (23) An iron curtain ran through Eastern Europe from the Baltic to the Mediterranean. West of the line, real property was predominately subject to private ownership. East of the line, real property was owned by the state. The results were *plain for all to see*: while towns and villages on the west side were typically neat and clean, with well-scrubbed streets and colorful boxes of flowers in the windows, towns and villages on the east side were drab and dirty, with plaster falling off the walls and no flowers to be seen anywhere. (COCA 2004)

- (24) But here in Europe, the legacy of the Marshall Plan is *visible for all to see*: in high-tech railways and highways, in prosperous, modern cities, in products from perfume to fighter jets. Four of the seven richest nations on Earth are European recipients of Marshall Plan assistance. (COCA 1997)

(21) – (24)の*for all to see* 文は何かの結果や帰結が誰の目にも明らかであると述べているが、後続文脈に目を向けると、当該文で述べた事柄の詳細な説明が続いていることがわかる（各例の下線部を参照）。この時話者は、*for all to see* 文を用いて単純に状況描写を行っているだけでなく、自分の見解を主張し、聞き手を納得させようとしている。*for all to see*文に続く一連の解説は、*for all to see* 文による主張の根拠づけとなっているのである。

続けて次の3例を見てみよう。

(25) HENRY: At a joint news conference with South Korean President Lee, Mr. Obama compared Iran to North Korea as an international outlaw in the wake of the conspiracy to kill the Saudi ambassador to the U.S. While the Iranian government had denied any role, the president flatly charged through the Qods forces, it was in cahoots with Iranian-American suspect.

OBAMA: We also know that he had direct links, was paid by, and directed by individuals in the Iranian government. Now, those facts are *there for all to see*.

(COCA 2011)

(26) The U.S. government's focus on UBS became clearer in June, when a former UBS employee pleaded guilty to helping a California real estate developer evade millions of dollars in taxes. The former banker, Bradley Birkenfeld, has been cooperating with the Justice Department, and his sentencing has been delayed twice for the government to take maximum advantage of his help, according to court records.

"When all is said and done, the full nature and scope of Brad Birkenfeld's contribution to the investigation will be very *clear for all to see*," David E. Meier, an attorney for Birkenfeld, said by e-mail recently, declining to comment further. (COCA 2008)

(27) Mr. BLAKEY: No, Mike, there are two official findings. The Warren Commission was a presidential commission and our committee was a congressional committee. They're both official if you want something official.

KINSLEY: But don't people—

Mr. BLAKEY: It doesn't make any difference—Mike, it doesn't make any difference what's official. It makes a difference is what's based on the evidence and the evidence is *there for all to see*.

KINSLEY: Don't people have the right to be skeptical of the findings of the Warren Commission if your own committee concluded that they were very likely wrong and doesn't that open up the whole kettle of fish all over again? (COCA 1991)

(25) – (27)では, *for all to see* 文が話者の発言の締め括りに使われている。この点で, 直後にその根拠づけが続けられている(21) – (24)とは対照的である。しかし, 聞き手に対する説得の方法が異なるだけで, 話者が自らの見解について聞き手を納得させようとしているという基本的な特徴は両者に共通している。(21) – (24)と異なるのは, 聞き手からの追及や反論を断ち切るために*for all to see* 文を利用していることである。(26)では, 相手の追及を断ち切りたい発話者の意図は後続の「それ以上コメントすることを拒否した」という解説からも明らかであり, (27)では, 自分と見解の食い違う相手に二の句を継がせないために *for all to see* 文を用いている (その試みは成功していないが)。

以上, 2つのケースを確認したが, いずれの場合も, 話者は *for all to see* 文を用いて自らの観点の正

“Kill Bill” movies. It sits in her living room like a revered statue for all to see. [= (11a)]

(29a) は(28)と同様である。明らかに、主語指示物sheが自らの意思をもって誰の目にも触れるような仕方で舞台に立っている。sheが全ての人の目にも触れるという潜在的事態の実現は、she の能力次第であって、発話者は関与していない。発話者は、(28)の場合と同様、*for all to see* 文全体が表す事態を描写しているだけである。(29b) は、主語指示物が無生物であるという点では(28)や(29a)とは異なるが、主語指示物 (a model) が潜在的に誰の目にも触れうるような形で、あたかも自ら意思を持つかのように (あるいはそこに置いた持ち主の意図を反映するように) リビングに鎮座しているという状況を描写しており、潜在的事態の実現の可否は主語指示物の属性・性質に帰されているという点では(28)と変わらず、発話者はそのような状況を描写しているにすぎない。

同様のことは、タイプⅡの例にも当てはまる。2.2. で挙げた例の一部を以下に再掲する。

(30) a. The prisoners taken were *crucified* before the walls **for all to see**. [= (12a)]

b. But the industry’s defenders just as quickly concede — for the evidence is *etched* starkly on the mountainsides **for all to see** — that for many years the cutting was out of hand.

[= (13b)]

(30a) は、主語指示物 (the prisoners) に働きかける行為主体が明確に想定された事態を表しているため、(28)と同様である。一方、(30b) は、(2.2. でも述べたとおり) 山間部に証拠を刻み付けるといった事態に意図的に参与した行為・原因主体は想定されていない。しかし、描かれている状況の原因は、証拠の属性・性質に帰せられるものではなく、意図はしていなかったにせよ、証拠となる状況を山間部に作りだした行為・原因主体(森林伐採を行った行為・原因主体)に帰せられるべきものである。

このように、タイプⅠとⅡの場合、発話者は事態の描写という役割の範囲を出ることがない。ところが、タイプⅢとⅣに目を移すと、この図式が大きく変化していることに気づかされる。既に見た以下の例を参照されたい。

(31) a. Garibaldi’s kitchen is sequestered behind the dining room, while Marzano’s is *open* **for all to see**. [= (16c)]

b. Soon the images of the tsar and tsaritsa, their servants, and three of their children — including Anastasia — were *there* **for all to see**. [= (18a)]

(31)における *for all to see* 文には、主語指示物が誰の目にも明らかになっているという現在の状況を引き起こした事態の行為者・原因主体が描かれていない。to 不定詞で表される潜在的事態の実現に携わる存在物が、叙述スコープ (scope of predication) の中には一切含まれてない。言語行為用法は、この潜在的事態の成立に関与する主体の「空席」を発話者が埋めることで実現すると考えられる。

しかし、このような行為者・原因主体の欠落は必要条件にすぎない。現に(31)における *for all to see* 文は言語行為用法には該当しない。その理由は、描かれている状況から判断して、*for all to see* 文で描かれている潜在的な状況が全く実現しないという可能性はほとんどなく、発話者がそこにコミットする意味がない（または、コミットしているということが前景化しない）からである。結果として、発話者は、タイプ I や II と同様、単純な状況描写を行っているのと実質的には変わらない。

言語行為用法が成立するのは、叙述スコープから行為・原因主体が外れていることに加え、*for all to see* が指示する潜在的事態が実現しない可能性が高い場合である。3.1. で見た例からの抜粋を見てみよう。

(32) “When all is said and done, the full nature and scope of Brad Birkenfeld’s contribution to the investigation will be very *clear for all to see*,” David E. Meier, an attorney for Birkenfeld, said by e-mail recently, declining to comment further. [(26)より抜粋]

(33) Mr. BLAKEY: It doesn’t make any difference—Mike, it doesn’t make any difference what’s official. It makes a difference is what’s based on the evidence and the evidence is *there for all to see*.

KINSLEY: Don’t people have the right to be skeptical of the findings of the Warren Commission if your own committee concluded that they were very likely wrong and doesn’t that open up the whole kettle of fish all over again? [(27)より抜粋]

(32)では、文脈から判断して、Brad Birkenfeld の捜査への貢献のすべてが本当に誰にとっても明確になるかどうかは、明らかに未知数である（それどころか、そうはならない可能性が高いとさえ思われる）。(33)でも、Mr. Blakey は、証拠が誰の目にも明らかであると言っているにも関わらず、Kinsley は明らかにそうは考えていないことが直後の発言でわかる。どちらも、*for all to see* 文が想起する潜在的な事態が現実には成立していない（もしくは成立しそうにない）状況を表している。このように、現実の状況と潜在的事態の間に乖離が存在する場合に、発話者が潜在的な事態の実現に向け、自らの考えを強く主張することで努力するという側面が前景化され、*for all to see* 文は、いわゆる発語内効力 (illocutionary force) を帯びることになる。3.1. で取り上げた、*for all to see* 文の直後に根拠づけとしての解説が続く例についても、同じ説明ができる。根拠づけが必要であるということは、*for all to see* 文を発した時点で、すべての人が承知しているという潜在的事態は成立していないと話者が認識していることを意味する。もし、本当にすべての人が承知している事柄であれば、詳細な解説・根拠づけなど必要ないはずだからである。

繰り返し述べているように、*for all to see* は実現する事態ではなく未実現の潜在的な事態を表すため、「特定のモノの存在が、潜在的にすべての人にはっきりと見える（わかる）」という意味を表す。あくまでも潜在的であるから、すべての人が実際に見た（わかった）かどうかについては何も述べていない。現実にはどのくらいの人がそれを目にするかについてはあらゆる可能性があってよい。当然、

現実的に言っても誰がどう見ても明らかであるような状況を描写する場合もあってしかるべきで、その場合は、*for all to see* は潜在的な事態だけではなくあたかも現実的な事態も指示しているかのよう
に解釈される ((31)などが、これに該当する)。一方、実現していることが望ましい潜在的事態が
実現していない場合もある。このような状況に対処する場合、より実現の見込みが高くなるように当該
のモノに働きかけるとするのが最も一般的かつ有効な手段である。タイプ I (およびタイプ II) は、
事態内の行為・原因主体がその働きかけに携わる状況を描いている。それとは対照的に、タイプ III と
IV の言語行為用法において、その働きかけの担い手は発話者である。無論、事態内の行為者のように
そのモノを移動させるのではなく、そのモノが誰の目にも明らかであると主張することによって、誰
もが当該のモノの存在を認めるという潜在的事態の実現を目論んでいるのである。

以上の分析を、簡易な図式にまとめておこう。発話者と描写状況の関係性について、*for all to see*
文には以下の 3 つのパターンが認められる。

- (34) a. 発話者 — (描写) → [行為者(原因主体) → 行為 (or 状態の維持) → 潜在的事態の実現(目標)]
 b. 発話者 — (描写) → [~~行為者(原因主体)~~ → 潜在的事態 ≡ 実現している事態]
 c. [発話者 — 言語行為 (主張) → 潜在的事態の実現 (目標)]

ある要素が四角括弧 ([]) 内にあることは、当該の要素が描写される事態内にあることを意味して
いる。(34a) では、発話者は事態の外部にいて、事態を描写している。事態内では、行為・原因主体
が、*for all to see* が想起する潜在的な事態を実現させるための行為・状態に携わる。これがタイプ I
や II の場合である。(34b) は、*for all to see* が想起する事態の実現に関わる行為・原因主体が存在し
ていない。これは、潜在的事態と現実的事態との間に乖離が認められない場合である。この時、依然
として発話者は事態外部から事態を描写するという役割にとどまっている。タイプ III と IV のうち、言
語行為用法以外の事例がこれに該当する。最後に、(34c) の場合は、潜在的事態は現実には成立して
いないことを了解したうえで、話者がその実現に携わる。この場合、話者が描写する事態と話者が身
を置く発話事態の間の区別が解消する。これがタイプ III と IV における言語行為用法の舞台裏である。

本節の議論を終える前に、そもそもなぜこのような発話者の「介入」が可能であるか、という点に
ついて付言しておきたい。発話者は本来、発話事態に位置づけられており、言語で記述される事象内
の参与者(行為者)とは同一化しえないはずの存在である。¹¹⁾ 描かれる事態と発話事態という、本
質的に相容れないはずの 2 つの領域を同じ *for all to see* という形式の下で結びつけてしまうという
奇妙な現象は、何が可能にしているのだろうか。一つには、おそらく潜在的事態の行為主体が *all* (す
べての人) であるということが関係すると思われる。*for all to see* 句において *all* が指し示すのは、「to
不定詞が表す潜在的事態に潜在的に参与している、*see* の行為主体となりうるすべての人々」である。
潜在的にすべての人に開かれているわけであるから、潜在的に事態の参与者になりうる発話者やその
聞き手も当然、含まれることになる。また、より理論的な観点に立てば、この認知プロセスは認知文
法論における主体化 (subjectification) の一種と捉えられる可能性もあるが、この点に関しては、さ

らなる詳細な検討が必要である。¹²⁾ ここでは、その可能性を示唆するにとどめておきたい。

3.3. *For all to see*の多義性再考

3.2. の議論を踏まえ、OALDの定義に立ち戻ろう。OALDは以下の2つの意義を提示していた。

(35) clearly visible; in a way that is clearly visible [= (4)]

2節では、タイプⅠとⅡが‘in a way that is clearly visible’に、タイプⅢとⅣが‘clearly visible’に相当することを確認した。しかし、(34)の観点から言語行為用法の存在を確認した今、この見解に幾分の修正を加える必要がある。実は、タイプⅢとⅣの言語行為用法において、*for all to see*はタイプⅠやⅡと同じく‘in a way that is clearly visible’に近い意味も表していると言える。ただし、特定の事物（それ自身を含む）が誰の目にも明らかになるような仕方で（in a way that is clearly visible）何らかの行為・状態にたずさわる主体が、描写されている事態内の行為・原因主体ではなく発話者であるという明確な違いがある。後者の場合、発話者が、何事かが誰にも明らかになるような仕方で、主張という言語行為に及んでいるのである。

次に、「視覚」領域と「認識」領域と言語行為用法の関係性について検討しておきたい。3.1. で挙げた言語行為用法の事例はすべて、動詞 *see* が認識領域での意味に対応しており、視覚領域での意味に対応する例は存在していない。これには経験的動機づけがある。我々は、物事の認識のレベルでは他人との食い違いは頻繁に経験するが、それに比べ、何かが視覚的に捉えられることが多くの人と共有できないという経験は圧倒的に少ない。したがって、潜在的事態と現実の事態の食い違いに基盤を置く言語行為用法が、認識領域で *see* が解釈されるケースに偏るのは自然なことである。しかしこれはあくまでも蓋然性の問題であり、動詞 *see* が視覚領域で理解される場合の言語行為用法が生じうる可能性は排除されていない。以下の諸事例を参照されたい。

(36) Enough of these comparisons. The similarities between Platonic contemplation, on the one hand, and perceptual contemplation and its place in our lives, on the other hand, is *there for all to see*. No point in belaboring the obvious. (COCA 1997)

(37) The point is that in the United States we have a legal form of political corruption. We have a system in which the purchase of politicians and government policies is lawful. But even though these patterns are *there for all to see*, political commentators rarely make this connection. (COCA 2002)

(38) ...I come upon a particularly colorful and dynamic scene that I'd like to paint and realize that such vibrant colors really are *there for all to see* if they only take the time to look.

[(18b) より抜粋]

(36)–(38)はすべてタイプⅣの事例であり、「ある事物について、話者にしてみれば誰の目にも明らかであるはずなのに、現実にはそれが見えていない（認識できていない）人がかなりいる」という文脈で用いられている。3.1. で挙げた諸例ほど明確ではないにせよ、これも言語行為用法の一種であると判断できる。注目すべきは、(36)と(37)では、*see* は認識領域で解釈されているが、(38)では視覚領域で解釈されているということである。問題となっている *vibrant colors* (活気のある色彩) は明らかに視覚で捉えるべきものであって、「もし彼らが時間をとってみさえすれば」という *if* 節の内容は、現実にはそういう風に見ない人もがいることも十分ありうるということを暗に示している。

以上の考察を総合すると、*for all to see* の多義構造の本質を捉える上で、*see* が視覚と認識のいずれの領域で理解されているかという点だけではなく、当該の *for all to see* 文において発話者がどのような役割を担っているかという点を考慮することも必要だといえる。

4. 議論—*for all to see*は幾つの構文から成るか

前節までは、タイプⅢとⅣにおける言語行為用法の事例を確認し、この用法がタイプⅠやⅡでは実現しないことを確認した。特定の形式に特定の意味・用法が結び付けられているという事実は、その形式と意味の組み合わせが一つの独立した構文 (construction) を形成していることを示唆している。*for all to see*における言語行為用法の存在は、この用法に対応するタイプⅢとⅣが、タイプⅠやⅡとは全く別種の構文として話者の知識内で処理されている可能性さえ示唆しているのである。これが事実であるとすれば、用法基盤的構文文法理論 (usage-based construction grammar) の考えに符合する。¹⁴⁾ この理論は、*for all to see* という抽象度の高い構文知識よりも、この句が生起する文の形式が特定された、より抽象度の低い構文知識の方が優先的に活性化されていることを予測するからである。そのような抽象度の低い複数の構文同士が *for all to see* という共通項を基に互いに緩やかに関連し合いながらネットワークを形成していて、*for all to see* という独立した句は、それら個別の構文における事例から導出された事後的な (epiphenomenal) 存在であることが予測される。この観点から、以下では、タイプⅢとⅣを取り上げ、これらがそれぞれ独自の性質を持った構文である可能性を探っていく。

タイプⅢとⅣには、言語行為用法を可能にするという共通点はあるものの、少なくとも2つの相違点がある。第一に、既に2節で見たように、*for all to see* の意味的な貢献のあり方が異なる。タイプⅢでは述語の形容詞の意味とオーバーラップしているが、タイプⅣでは、‘clearly visible’ という意味内容を担う唯一の要素である。もう一つの相違点は、各タイプにおける *for all to see* と述語との関係性に見出される。(39)を見てみよう。

- (39) a. The first night passed with no further incident, save toward morning when he realized dawn would find him pinned against the sky by the mainmast, plain for all to see.

(COCA 2010)

- b. These are Catholic homes built this way, open for all to see, to symbolize their clarity of soul, Kevin tells us. (COCA 1991)
- c. The Clintons, ladies and gentlemen, plain for all to see, will do or say anything to win. (COCA 2008)

述語の形容詞と *for all to see* がまとまり (chunk) を成して、挿入句のように用いられている。このようなことはタイプⅣでは見られないし、おそらく今後も生じる可能性は低い。(40)のように、*there* と *for all to see* の間には何らかの要素 (多くの場合、場所を表す語句) が介在する場合があるからである。この種の事例はタイプⅢでは見当たらない。

- (40) These possibilities could perhaps be linked with the division of loyalties, the co-presence of conservative and iconoclastic, elitist and egalitarian strains, which was there on the page for all to see. (COCA 1996)

このような形式上の差異は、第一点目の相違点として挙げた意味関係の違いに帰着できるであろう。タイプⅢの場合は形容詞と *for all to see* が類似の意味内容を担うため、意味の境界・棲み分けがはっきりとせず渾然一体となっているという状況をそのまま反映する形で、形式上も両者を切り離すことが難しくなっているのであろう。一方、タイプⅣの場合は *there* と *for all to see* の間の意味の区別はタイプⅢの場合よりも明確であるため、形式的に両者を切り離すことが可能になっていると考えられる。しかし、そうはいうものの、タイプⅣの場合でも、*for all to see* が *there* よりも後ろの位置から離れて前置されているような事例はこれまでの調査では見つかっていない。タイプⅣという形式を有する独自の構文内での *there* と *for all to see* の間の結束性は、単に語が介在するか否かという単純な基準では測れないものなのかもしれない。さらに言えば、言語行為用法が成り立ち、かつタイプⅣでも *there* と *for all to see* の間には要素が介在している事例がこれまでのところは見つからないことを考えると、タイプⅣの中でも、言語行為用法の場合とそれ以外の場合で、既に形式上の違いができてつある可能性もある。もしそうであるならば、タイプⅣが将来的にさらに2つの構文に分化していくことも十分にありうる。¹⁴⁾

以上のような問題に対して確たる解答を提示し、タイプⅠとⅡも含めた4つのタイプの構文間の関係を包括的に捉えるためには、さらに多くのデータ収集とその検証が必要である。しかし少なくとも、本稿で提示した成果から判断すれば、*for all to see* という慣用句の知識がこの句を含む複数の構文からなるネットワーク構造を成しているということは間違いないであろう。

5. 結語

本論文では、COCAとARの事例を基に、現代英語の *for all to see* の記述と分析を提示した。まず、この句を含む文を複数のタイプに分類し、意味と形式の両面から網羅的な記述を試みた。次に、文の

レベルを超えた視点から、すぐれて語用論的な要因が関与する意味（言語行為用法）を特定し、その分布の制限について認知言語学的観点から説明を試みた。最後に、用法基盤的構文文法理論的な観点から、*for all to see* に関する知識構造の在り方について考察し、今後の研究課題も含めたいいくつかの可能性を示唆した。

今後の課題としては、2つの方向が挙げられる。一つは、複数の構文からなるネットワーク構造をなす *for all to see* のカテゴリ構造をより正確に記述するために、更なるデータの収集と分析を続けていくことである。今一つは、本研究で見出された、事態内行為者が占めるべき役割を発話者に担わせるとする一見非常に特異な認知過程が *for all to see* 以外の現象でも観察できるものなのかどうかを検証していくことである。併せて、本論文中でも触れたように、意味現象の説明のために諸家が提案してきた概念 (subjectification など) とこの現象との関わりについても追究していく必要がある。

注釈

- 1) このto不定詞句は、Jespersen (1940: 221) が遡及的不定詞 (retroactive infinitive) を呼ぶものの一種である。
- 2) 以下の例における *for all to see* は、*see* がto不定詞節内で (形式上の) 目的語を伴っているため、本研究の対象外である。
These differences in transcripts provide an excellent opportunity for all to see a number of problems inherent in even the most scientific observation process. (COCA 1990)
- 3) これ以降、コーパスからのデータに施した強調・イタリック体・下線はすべて筆者によるものである。
- 4) OALDおよび安藤 (2011) には“for all (the world) to see”という項目が挙げられており、*all*の後に*the world*を伴った表現も同義であるかのように扱われている。確かに*for all to see*と*for all the world to see*の意味・機能は似た部分も多いが、相違点も多い。詳細は別稿に譲ることとし、本稿では*for all to see*のみを扱う。
- 5) 動詞*see*の多義性についてはGisborne (2010: Chapter 4) などに詳しい。
- 6) COCAを調べる限り、他動詞文の方が頻度は圧倒的に高い。
- 7) <http://www.americanrhetoric.com/speeches/barackobama/barackobamaapluncheon.htm>
- 8) 構文事象を観察する際に単文レベルを超えた視点も採り入れることの重要性は山梨 (2009: 第6章) において説得的に論じられている。
- 9) この言語行為 (発語内行為) はSearle (1975) の5分類のうち、assertiveタイプに相当すると考えられる。
- 10) この点に関してはAustin (1962) を参照。
- 11) 使用事態 (usage event) の概念についてはLangacker (1988, 2000) を参照。
- 12) 主体化 (subjectification) についてはLangacker (1990) をはじめとする一連の研究を参照。
- 13) 用法基盤的構文文法理論 (usage-based construction grammar) という名称を用いたのはBybee (2010: 57) であるが、基本的な理念はそれ以前の、他の研究にも見られる (Croft 2001; Goldberg 1995, 2006; Langacker 1988, 2000; Tomasello 2003等)。特に、低次スキーマの優位性の考え方については、Langacker (2000) の以下の引用に最も明確に述べられている。
“... lower-level schemas, i.e. structures with greater specificity, have a built-in advantage in the competition with respect to higher-level schemas.” (Langacker 2000: 16)
- 14) Bolinger (1961) が統語的融合 (syntactic blends) と呼ぶ現象が起こっている可能性もある。

参考文献

- 安藤貞雄 (2011) 『三省堂 英語イディオム・句動詞大辞典』三省堂, 東京.
- Austin, John (1962) *How to Do Things with Words*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Bolinger, Dwight (1961) "Syntactic Blends and Other Matters," *Language* 37, 366–381.
- Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*, Oxford University Press, Oxford.
- Gisborne, Nikolas (2010) *The Event Structure of Perception Verbs*, Oxford University Press, Oxford.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago University Press, Chicago.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, Oxford.
- Jespersen, Otto (1940) *A Modern English Grammar*, Part V, Allen & Unwin, London.
- Langacker, Ronald W. (1988) "A Usage-Based Model," in Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*, 127–161, John Benjamins, Amsterdam.
- Langacker, Ronald W. (1990) "Subjectification," *Cognitive Linguistics* 1, 5–38.
- Langacker, Ronald W. (2000) "A Dynamic Usage-Based Model," in Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-Based Models of Language*, 1–63, CSLI Publications, Stanford.
- 南佑亮 (2012) 「For all to seeの語法と多義性について」『英語語法文法学会20周年記念大会予稿集』44–51, 英語語法文法学会.
- Searle, John R. (1975) *Expression and Meaning*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Tomasello, Michael (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*, Harvard University Press, Cambridge.
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性—』大修館書店, 東京.

辞書・辞典

Oxford Advanced Learner's Dictionary (8th edition) [OALD]

コーパス・データベース

American Rhetoric (<http://www.americanrhetoric.com/>) [AR]

Corpus of Contemporary American English (<http://corpus.byu.edu/coca/>) [COCA]